



「気候風土に学ぶ —暮らしと健康の歳時記」

吉野正敏 編,
 バイオクリマ研究会 著,
 学生社, 2004年2月
 226頁, 1950円 (本体価格),
 ISBN4-311-20271-7

「家庭内暴力は夏にピークがある」、「冬の肌の乾燥には鍋料理や観葉植物で室内の湿度を上げよう」、「こたつをもっと利用して、地球環境問題に対するささやかな対策を」などと目にすると思わず引き込まれ、先を読み進みたくなる。

あとがきによると、国土環境(株)が「お天気情報」としてホームページに流したコラムから、編者の吉野正敏氏(バイオクリマ研究会・会長)が文章の長さを調節し、図表などを少なくしてまとめたところ。バイオクリマ研究会は「医学気象予報」に向けた基礎研究を目的とする研究会で国土環境(株)に事務局をおいており、生気象学会会員を中心に約50名の会員で構成されている。

本書にはこの研究会に属する22名の著者による2～5ページのエッセイ風の読み物が、春、夏、秋、冬の章に分けられ、読みやすく配置されている。春の章は、「雛祭り」、「啓蟄と露のとう」、「黄砂」、「気象病としてのうつ病」、「UV対策はOK!」など18項目、夏の章は、「さくらんぼ」、「夏と日本の伝統家屋」、「不快指数」、「冷房」、「浴衣」など20項目、秋の章は、「スポーツと傷害」、「食中毒」、「柿と栗と銀杏」、「喘息シーズンきたる」、「冬眠の知恵に学ぶ」など19項目、冬の章は、「結露と上手におつきあい」、「ブーツ」、「御神渡り」、「床暖房」、「子どもは風の子?」、「季節労働者」など21

項目から構成されている。

各項目を担当する著者の専門は気象学、医学、生活科学、建築学など多岐に渡っているが、平易な読みやすい文章でつづられており、一つ一つの項目が読みきりのため、電車の中でも、気楽に読める本である。しかし、読み進んでゆくと、各著者の専門と、長年の経験に裏打ちされた奥深い知識に触れる事ができ、決して単なる軽い本ではない。

「春の彼岸」に関する記述の中には、「キンセンカはドイツ語でシュトデンテンブルューメンともいわれる学生の花」とか、全国各地の雑煮について、「使うもちが丸餅か角餅かというもちの形や中に入れる具の種類」が図で解説されていたり、夏の風物詩「スイカ」については、「鳥獣戯画の中に西瓜らしいものを持つうさぎが登場する」などと知らず知らずに、雑学の知識に触れる事ができる。しかも、全ての項目がそれぞれの著者のバックグラウンドによる本物の知識で裏付けられており、安心して読める。

図表も概して(3章までは)大変分かりやすく工夫されているが、惜しむらくは、専門分野が異なる読者に対して、もう少し丁寧な説明が欲しいものもあった(特に4章)。例えば、図4-20(p.217)では、横軸が1年間を週単位の数値で示されているが、季節の表示区分(春、夏、秋、冬)の補助軸があった方が分かりやすいと思われる。また、図4-14(p.157)、4-18(p.203)、4-16(p.206)は横軸にそれぞれの図に相応しい数値があったほうがよい。

全体として、「学ぶ」事の多い本である。文系の大学の基礎ゼミなどで、はじめて「気象」に触れるとしたら、手ごろな教材としては是非お勧めしたい1冊である。

(江戸川大学 土器屋由紀子)